

記念館新聞



福崎町立
柳田國男・松岡家記念館
〒679-2204
神崎郡福崎町西田原
1038の12
電話：0790-22-1000

雑誌『郷土研究』にみる

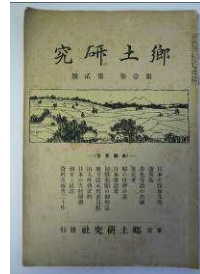
國男の民俗学研究への思い

雑誌『郷土研究』は民俗学の専門月刊誌として、大正2年(1913)3月に創刊されました。

國男は神話学者の高木敏雄の協力を得て、発刊しました。そして、さまざまな領域の人々から原稿が寄せられるようになっていきます。

『郷土研究』の「寄稿者及通信者芳名」には、276人の名前が記されています。このうち、東京以外すなわち地方からの投稿者数は190人を数えることができます。

國男は、『郷土研究』という雑誌の誌面で、民俗学を担う人々を育成することを望みました。そこで、年中行事や生業に関する慣行などの資料報告を募り、地方からの投稿者に眼を向けました。



『郷土研究』第1巻第2号

このようにして報告資料が蓄積されていくと、國男は報告者に対して多くの助言や注意を与えるようになりました。

これは資料を集める段階を越えて、さらに学問を深めて欲しいという國男の思いの現われでした。

けれども、報告者にとつては、その思いは重かったようです。結果的に資料報告の投稿数を減らすことに繋がってしまいました。

『郷土研究』は、創刊から4年目の大正6

年(1917)3月に休刊となります。休刊の理由は、寄稿者が少なく、しかも研究と呼べる内容が少なくなったことであると、國男は記しています。

そして、昭和6年(1931)2月に復刊しますが、昭和9年(1934)4月に終刊します。

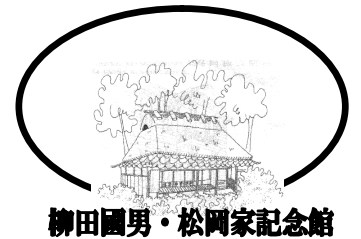
『郷土研究』の刊行は短期間でしたが、民俗資料の収集と地方研究者の育成の基礎を築いた雑誌であるといえます。

名作著書紹介

故郷七十年を讀む

國男は『郷土研究』に匿名で多くの原稿を書いています。

『故郷七十年』の「匿名のこと」には「大正二年三月、高木敏雄君とともに『郷土研究』という



柳田國男・松岡家記念館

☆☆入館案内☆☆

☆開館時間

9時～16時30分
(入館は16時まで)

☆休館日

月曜、祝日の翌日
12月28日～1月4日

☆入館料

無料

雑誌を創刊し、毎月千部ずつ頒布することがあるが、高木君はやがて私と袂を分けて同誌に執筆しなくなり、一般のその雑誌に対する同情は集まりつつも執筆者が少なくなった。(中略)『郷土研究』の執筆者の少ない分を、私は匿名による、いささか文体を違えた文章で補ったが、四巻十二号休刊のさい、世間を罵倒する「休刊の辞」を本名で記し、その後、雑誌刊行中使用した匿名を全部使用して短文の報告を載せた」と記しています。

『郷土研究』で國男が用いたペンネームは19に及んでいます。『故郷七十年』ではペンネームの由来についても記しており、その一つである「尾芝古樟(おしばこしやう)」は「北条の母の実家の姓と、同家にあつ

た樟(くす)の老樹にあやかったもの」とあり、他にも國男の祖父母や両親、柳田家に連なる家々から名前をつけたことを述べています。

そして、雑誌の刊行には「姪の婿に当たる岡村千秋が色々の事務を担当してくれた」とあります。國男は大正3年(1914)に貴族院書記官長となつており、この多忙な時期に雑誌の執筆・編集を行っていました。

刊行の実務を引き受けた岡村千秋は、長兄である松岡鼎の次女茂子の婿です。岡村は國男や小説家の田山花袋(たやまかたい)と親交があったことから縁が結ばれました。

このように『郷土研究』は、様々な人の協力と國男の熱意によって生み出されたものであることがわかります。



館日記

今年度、福崎町で「柳田國男ふるさと賞」が創設されました。

この賞は、柳田國男の顕彰を図る共に、地域の歴史、民俗文化に対する興味・関心を高め、郷土に愛着と誇りを持つ子どもを育成を目的として設けられました。

この賞は、國男が『郷土研究』で志したように、地域における民俗学を担う研究者の育成につながるものであると思います。

柳田國男ふるさと賞では、小学生・中学生を対象に、地域の歴史や文化について研究、調査した作文、レポートなどを募集します。そして、作品を審査し、表彰します。

募集要項などの詳細は、あらためてご報告させていただきますので、よろしくお願ひ致します。

